CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
Provided by Okayama University Scientific Achievement Repository

岡山大学大学院社会文化科学研究科『文化共生学研究』第16号（2017. 3）

清国貿易による海外飛躍を目指した一日本人の実像
—福岡県直方市の向野堅一記念館は何を目指すか—

向野　正弘

はじめに

2016年の春、シンポジウム「もう一つの『学都』岡山の物語—閑谷学校を中心とする近代東アジアネットワークの研究—」（於岡山大学文法経一号館二階文学部会議室、2016. 3. 26）に、向野堅一記念館を代表する形で参加させていただいた。

向野堅一は、白岩龍平（岡山出身）らとともに、上海の日清貿易研究所に学び、後に満洲日本人財界の重鎮になっていった人物である。当該人物については、旧来、日清戦争史や満洲経済史の領域で断片的に語られてきた。向野堅一顕彰会理事・向野康江は、地道な文書の読解に取り組み、ミクロ経済史の視点で、経済界形成の道程、親族や交友関係に着目しながら「向野堅一（1868-1931）の経済活動—日清貿易模索から奉天実業界形成への道程／向野書簡を中心にして—」を執筆した。奇しくも当シンポジウムと同日に、北九州市立大学より「博士（学術）」の学位（北九大院甲第88号）を授与されることになった。以上の理由により、筆者が参加することとなった。

筆者の向野堅一研究は、向野堅一顕彰会とはやや異なる目論見の下、「修猷館から日清貿易研究所へ—向野堅一を形づくるもの—」と題して報告させていただいた。日清貿易研究所に集う若人の背景について考察したかったからである。当日の発表内容に対して御教示いただいた点は多かった。記して関係者各位に感謝申し上げる。本稿では、当日の報告の成果を含めつつ、向野堅一の歩みを概観し、記念館を運営する立場で研究の課題などを整理したい。なお、拙稿中、敬称を附すべきとも考えたが、煩瑣であり、基本的に省略させていただく。寛恕賜りたい。

１．日清貿易研究所へ

向野堅一（以下、堅一と記す）の出生から日清貿易研究所までの足跡をまとめると、次の略年表のようになる。

略年表〔１〕

	向野堅一ならびに周辺	日本～中国～世界
1868（明治元／同治７）	**⑨４出生（旧名：寅吉）。［福岡縣鞍手郡新入村大字上新入千九百五十番地ノ二　平民］**	③五ヶ条の誓文⑨明治改元
1874（明治７／同治13）	新入尋常小学校入学（？）	①民選議院設立を建白②佐賀の乱
1881（明治14／光緒７）	**③鞍手郡新入高等小学校卒業** **⑤鞍手郡新入明善義塾に入り、漢学修業**	①国会開設の詔
1885（明治18／光緒11）	**③明善義塾を退き、福岡勉焉学舎に入り、普通学を修む** ⑨10英語専修修猷館開館式挙行。	④天津条約 ⑫内閣制度実施

1886（明治19／光緒12）	**福岡縣立修猷館に入学**	⑩ノルマントン号事件
1889（明治22／光緒15）	⑥日清貿易研究所事務室、第一回入学生募集開始。【⑪１玄洋社員・来島恒喜葬儀（福岡）】⑫　荒尾精、勝立寺（福岡市）において演説。六百人以上を集める。	⑩18玄洋社来島恒喜、大隈重信外相を襲撃。
1890（明治23／光緒16）	③13修猷館を「福岡県立尋常中学修猷館」と改称。**③病気に依り、福岡縣立修猷館を退学**	⑤大津事件⑤露シベリア鉄道起工
1891（明治24／光緒17）	**⑨在清國上海日清貿易研究所に入学** ⑪25「寅吉」から「堅一」へ改名。	⑩30教育勅語発布
1893（明治26／光緒19）	**上海日清貿易研究所全科卒業** ⑥29卒業式挙行。卒業生八十九名。	○横浜正金銀行、上海支店設立

※「履歴書」によるものはゴシック。○数字は月を、その後ろの数字は日にちを表す。（以下同）

堅一は、明治1.9.4出生。明治改元は慶応4.9.8であり、改元前ということになる。ただ元旦に戻って改元しているので、戸籍上は明治元年で問題ない。当該報告では、小林よしのり『ゴーマニズム宣言　SPECIAL　大東亜論第二部　愛国志士、決起ス』（小学館、2015.12）に登場する玄洋社に所属する宮川五郎三郎少年を例に挙げて世代の特徴を示した。彼らの世代は、幕末・明治維新の興奮の中に生きる世代ではなかった。さりとて、近代的な学制にうまく乗れる世代でもなかった。玄洋社とは、そうした世代の組織であったろう、と考える[1]。向野堅一に、筑紫洋行の再建を断念させ、その熱い友情から別の道を模索させた宮川五郎三郎は、堅一と同年で玄洋社の主なるメンバーよりは若輩である。宮川は、後に朝鮮のジャーナリズム、経済界に重席を占める人物となる。

日清貿易研究所は、荒尾精の構想どおりに実現できた学校であったか否かは、今後の調査に基づく評価を俟つしかない。順調に事が運んだ点があるとすれば、日本全国から受験者を集めたことである。当時、日清貿易研究所の学費はとても高額なものであった。受験できた者、そのうち合格して進学できた者、いずれも近代的な貿易モデルを模索する新旧の富裕層に属する者たちであった。ただし富裕といってもかなりの幅があった。ともかく同じ志をもつ者達が、上海の一角で３ヶ年間、マラリアと戦いながら学ぶ同志となった。以降、異国の地で学んだ者達は、一種独特な連帯感を醸し出していくようになる。

白岩龍平と福原林平とが岡山の閑谷黌で学び、漢学の基礎を身につけたように、堅一は、郷里新入の秦塾（はたじゅく）で学んだ。塾主・秦巌（はたいわお）は、長州藩との戦いで小倉藩が敗れ、企救郡（門司区・小倉北区・南区の三区）の領地が長州藩預かりとなり、毛利氏の支配下に置かれることになったため、小倉藩藩校の蔵書を携えて畑村に落ち延びていった人物であった。彼は、企救郡出身の小倉藩士だったからである。日清貿易研究所出身者の根底には強固な漢学の素養がある。たとえば、藤井善助が日清貿易研究所に入学していることである。途中退学しているものの、彼は近江商人の家に生ま

1　彼らは中途半端な世代であることを、その当時自覚することはできなかったであろうが、その後の近代学校の卒業生達を見るにつけ、感じるものがあったのではないだろうか。また、一見すると、堅一と玄洋社との関わりは、緩やかなものとみえる。しかしよく見ていくと、強固に結びついている。

れ、後に経済人として大成して衆議院議員になった。中国古美術骨董の収集家でもあり、藤井有鄰館を開設した点など、中国文化への憧憬を感取できる。彼らのこの漢学の素養について理解しないと、彼らの生き方は見えてこないであろう。漢学というものは、全人格教育であり、人間性の陶冶を根底に据えている。したがって、その力量は飾りようもなく、中国の郷紳・紳商にも通じる力となっていくことを指摘しておく。

堅一は卒業を目の前にして修猷館を退学する。それまで英語修猷館で英語漬けの日々を送っていた。結果として、このことが日清貿易研究所でも役立った。初期の構想とは異なり、日清貿易研究所は、その当時のカリキュラムを見ると英語と清語（北京官話）を学ぶ語学学校のようでもあった。英語の成績が成績を大きく左右したであろうことは想像に難くない。

日清貿易研究所の卒業生を「八十九名」とする。この間、多数の中退者を出している。成績上の問題ではないようである。当初考えていたものとかなり違い、不満の種は尽きず、閉じた空間は高いストレスを伴ったと考えられる。彼らは、頻繁に集まって議論を交わしている様子が『白岩龍平日記』から読み取れる。将来に対する漠たる不安。「残るも地獄、去るも地獄」といったところではないか。残るにしても、去るにしても、経済援助をしている父兄の意向は大きかったであろう。ただ、最終的には個人の判断とみる。筆者は退学した者の判断を合理的とみる。それでは、残った者を支えたものは何か。突き詰めれば、志を同じくする友人たちがいる、ということであろう。堅一をみると、友人達と卒業後の事業計画を練っており、明治24年５月15日『上海新報』50号掲載の「日清貿易研究所現存生徒諸子の決心」を見ても、皆でともかく卒業しようというあたりであったろうと考える。

２．日清商品陳列所から日清戦争・台湾従軍へ

日清貿易研究所卒業後の日清商品陳列所の研修時代から日清戦争をへて、台湾通訳官までの足跡をまとめると、次の略年表のようになる。

略年表〔２〕

	向野堅一ならびに周辺	日本～中国～世界
1893(明治26／光緒19)	**⑦日清商品陳列所に従事し、実地商業の研究をなす**	⑦１「日清商品上海陳列所」開設（二ヶ年間実習の予定）。※陳列所からの独立、上海・博多・久留米、ならびに北京城内に商店を運営する計画を有志と共に立案。
1894(明治27／光緒20)	**④清國長江沿岸の各開港場及び都府の視察に赴く。**⑧日清戦争 **⑧日清開戦の為め、上海に帰る⑧上海に於て根津少佐の命を帯び、清国軍隊及び運艦の行動を偵察す** ⑨黄海海戦 **⑨上旬上海に滞留する事、甚危険となり、帰朝す⑨19廣島大本営より召され、陸軍省通訳官として第一師団司令部附を命ぜらる⑩16第一司団と共に廣島を発し、征清の軍に従う ⑩盛京省花園河口に上陸せり。兼て二年前より辨髪せしを以て、第一師司令部より秘密偵察の特別任務を命ぜられ、支那服を徴発し土人に変装し、金普蘭店復州 城の偵察に赴く⑩25碧流河附近に於て、土人の集合隊に捕縛せられ、皮子窩の兵営に護送せらるる途中、暗夜に乗じ、監視者を欺き遁送す。山中に入り道を失し、四五日を経て漸く復州城に達す。此の地の偵察を終へ、普蘭店に出で再び騎兵に捕へられ訊問を受けしも、之を瞞することを得て遁る。夫れより金州城に着し、城の内外、敵の防備を偵察し、是れより道を皮子窩街道に執り、石門子の防禦工事を探**	

	り、皮子窩に於て我が騎兵に邂逅し復命することを得たり。爾後師団司令部と共に、金州・旅順の攻撃に従う　⑪旅順占領　⑪孫文：興中会結成（ハワイ）
1895（明治28／光緒21）	②第一師団と共に盖平城に赴く。大平山、営口、田庄台の戦に従う。　②威海衛占領　③盖平民政局支部附ヲ命セラレ民政局設置ヲ終ヘ司令部ニ復帰シ金州ニ帰ル　④下関（馬関）条約、三国干渉 ⑥１第一師団附を免じ、通訳官として占領地総督部附を命ぜらる　⑥29占領地総督部より、帰朝を命ぜらる　⑥台湾・彭湖島授受、台湾総督府　⑦１大本営より占領地総督部附を免じ、通訳官として大本営附を命ぜらる【履歴書】⑦11陸軍省より願に依り通訳官を免ぜらる　⑩〔朝〕閔妃殺害事件　⑩孫文、広州蜂起（失敗）。⑪27陸軍省より陸軍通訳官を命ぜらる　⑪27台湾総督府附を任ぜらる　⑫25明治廿七八年戦役の功に依り、勲七等青色桐葉章及び年金六拾円を授け賜わる
1896（明治29／光緒22）	①８台湾総督府より混成第七旅団司令部附を命ぜらる①11蘓澳湾に上陸し、宜蘭の土匪討伐に従う。③３台北に帰る　④台湾全島を平定。　⑤21陸軍省より願に依り、陸軍通訳官を免ぜらる

日清商品陳列所こそ、日清貿易研究所の要となるはずであった。なんとか卒業には間にあった。しかし実態は厳しいものがあったようで、堅一自身、旅行者の通訳として各地を旅行しなければならなかった。この旅行は、後の東亜同文書院の旅行とは明らかに異なる。

こうした苦労の最中に日清戦争が勃発。通訳官として採用された日清貿易研究所の卒業生も巻き込まれていくこととなる。そこでの同窓生達の無念の死。彼らは、探偵となるために教育されたのではない。また探偵となるために弁髪を結っていたわけではない。常識的な見地においても遂行できるはずのない任務であった。堅一の場合、天運が味方したことは確かである。が、彼自身の資質もあった。堅一の履歴書には、「監視者を欺き遁送す」「訊問を受けしも、之を瞞することを得て遁る」とある。二度捕らえられながら、二度とも逃れることに成功しているのである。単に中国語に通じていたというようなことではなく、中国人を信頼させるにたる交渉の仕方、別の言い方をすれば、信義のあり方を心得ているからこそ可能なことであったと考えている。この交渉力は、台湾においても発揮され、紳商に厚遇されたことなどが知られている[2]。

３．筑紫洋行開設から義和団事件の顛末

台湾から帰国後、筑紫洋行開設。義和団事変をへて日露戦争に至る足跡をまとめると、次の略年表のようになる。

略年表〔３〕

	向野堅一ならびに周辺	日本～中国～世界
1896（明治29／光緒22）	⑧14筑紫洋行（一名を筑紫弁館と称す）開設　⑩在北京日本公使館用達店として筑紫洋行を開設の為め渡清す	
1897（明治30／光緒23）	②従軍記章を賜はる　④１明治廿七八年戦役に継ぎ、再び台湾地方に於て軍務に服し、其功不少に付き、金四拾五円を賜わる	⑥米ハワイ併合⑩金本位制確立

2　橋本定幢『台湾浄土（百年の時を超えて）台湾再渡日誌（第一報）』（法蓮社道誉定雄、明治29年～）参照。

1899(明治32／光緒25)	○このころ、河北純三郎・香月梅外・郡島忠次郎と天津に商品陳列館開設計画立案。趣意書作成し、資金調達に奔走。	⑦治外法権撤廃⑨米中国の門戸開放提唱○義和団台頭
1900(明治33／光緒26)	②24～③上京。農商務省に働きかけ、年額二千円の補助獲得へ ⑥10義和団北京入城、21清国、諸国に宣戦布告⑥19～⑧14北京籠城**⑥義和団匪の為め、筑紫洋行を焼かれ、仍て商店を中止す**⑥10北京・筑紫洋行焼き討ち、支配人・中村秀次郎戦死。堅一は神戸に買出し帰国中。**⑦13第五師団監督部用達を命ぜられ、北清事変に従軍す**　⑧14連合軍、北京占領　⑩恵州事件	
1901(明治34／光緒27)	**④願に依り、用達を免ぜられ、北京より帰朝す**	⑪袁世凱、直隷総督就任
1902(明治35／光緒28)	**⑦～⑪広東省の内地を旅行す**	①日英同盟②梁啓超『新民叢報』創刊
1904(明治37／光緒30)		②８日露戦争

日清戦争、台湾通訳官という激動の通訳官時代の後、結婚して福岡に家庭をもつ。ある程度の資本金も溜まり、友人達とともに、かねてから計画していた商品陳列所構想の実現を目指して動き出し、筑紫洋行を日本公使館用達店として北京で開店する。ところが、経営は不調で資金繰りに窮す状態であったらしい。こうした状況を打開するために、天津商品陳列所設立を計画、補助金の獲得にこぎ着けた。なお、この補助金獲得に際して白岩龍平は、堅一の依頼を受けて小村寿太郎に取り継ぐことに尽力し、殊に矢野文雄へも依頼することを提案している[3]。

こうして天津商品陳列所設立計画は軌道に乗るかに見えた。しかし義和団事件に巻き込まれ、北京の筑紫洋行は焼失、支配人は戦死という窮地に追い込まれる。日本にいた堅一は、有馬組の社員となり、第五師団御用達有馬組主任として北京に向かうこととなる。収束後は、玄洋社の宮川五郎三郎等の助言を受けつつ、義和団事件の賠償を受けるとともに、筑紫洋行の跡地をドイツに売却することとなる。こうして巨額の資本を蓄積した堅一は、その後方向性に苦心するようである。商品陳列所構想は復活しなかった。広東省の調査も失敗。「金貸然」としているという評判が立つようになっていた。

４．奉天へ

日露戦争後の遼西物資調査のために新民府に赴いて以後、奉天時代の足跡をまとめると、次の略年表のようになる。

3 一方、堅一は大東汽船の株主であった。〔向野書簡0228〕は、「明治三十九年五月二日」付けの株主定時総会への案内状である。なお、〔向野書簡0467〕によれば、明治40. 3. 29に大東汽船の株を清算していることがわかる。両者あるいは日清貿易研究所関係者は、時に緊密に、時に緩やかに、相互に助け合っていた一端を知ることができる。彼らの交流は、一見緩やかなようで実は堅実に結びついているように感じる。彼らの歩みの意味を明らかにすることは、東アジアの経済史において重要な意義を有すことであろう。

略年表〔４〕

	向野堅一ならびに周辺	日本～中国～世界
1905（明治38／光緒31）	**⑥陸軍省より、遼西物資調査を命ぜられ、新民府に赴く**⑩21奉天への日本人の旅行を許可。⑫１奉天への日本人の居住を許可。営口・新民府から日本人来住。ロシア旧駅・十間房・小西辺門外・小西関などにバラック式建物や旧家屋を改造して居住。	③奉天会戦⑤日本海海戦⑧ポーツマス条約⑧孫文、同盟会結成⑨海外に憲政考察大臣派遣⑪第二次日韓協約
1906（明治39／光緒32）	**①奉天にて商業に従事し、石炭敗売を開始し、茂林洋行と称す**※茂林洋行は当初奉天小西門外。⑨24深水十八、初の日清合弁銀行正隆銀行（一名正隆号）設立、総会開催（『正隆号増之経過及第一回総会』）。堅一は資本参加。	⑨「予備立憲」勅令○湖南事件
1907（明治40／光緒33）	春．小西関、初めて硬道築造。このころ、茂林洋行、奉天西塔街へと移転	⑥〔朝〕ハーグ密使事件○日露協商
1908（明治41／光緒34）	**○城内より鉄道附属地に移転し、硝子製造を開設す**○奉天化学工業株式会社を開設。③**熊本縣深水十八氏と正隆銀行を設立す**⑪８奉鐵倶楽部結成（堅一は評議員）	欽定憲法大綱⑪光緒帝、西太后没⑫東洋拓殖会社（東拓）成立
一九一三（大正２／民国２）	⑨29「晋・有二・元生・啓助宛書簡」教育の基本的考えを表明 ⑫家庭内雑誌『骨肉』発行開始（一九一七まで計27冊確認）	
1914（大正３／民国３）	⑫23正隆銀行、竜口銀行を救済合併。	⑥28サラエボ事件。第一次世界対戦へ⑧日、独に宣戦布告
1917（大正６／民国６）	**瀋陽建物株式会社専務取締役となる**　⑨１満洲市場株式会社設立　⑪　瀋陽建物株式会社設立⑪21奉天化学工業株式会社創立（満蒙化学合資会社を改組）⑫満洲市場株式会社、煉瓦建円形二階建て家屋を建築。**⑫奉天商業会議所副会頭に選挙せらる**	①無制限潜水艦戦③露三月革命④米参戦　⑨孫文、広東軍政府⑨金輸出禁止⑪露十一月革命⑪石井・ランシング協定
1918（大正７／民国７）	②１瀋陽建物株式会社設立⑪10奉天銀行設立⑫25満蒙毛織株式会社設立	⑪キール軍港の水兵反乱（独降伏）○米騒動
1919（大正８／民国８）	⑧31奉天倉庫信託株式会社創立、監査役に就任○奉天製氷株式会社、監査役就任	①パリ講和会議③〔朝〕三一運動③15戦後恐慌⑤五四運動
1920（大正９／民国９）	⑤22満洲実業団大会（於大連商業会議所）参加　⑨３事業苦境へ、福岡市因幡町の自宅売却　夏．一家、奉天琴平町五番地に移住。	①国際連盟加入⑤第１回メーデー
1922（大正11／民国11）	**⑪奉天商業会議所副会頭を辞任す**	②海軍軍縮条約、九カ国条約④第一次奉直戦争（～⑥）⑩シベリア撤兵完了
1923（大正12／民国12）	**⑦奉天商業会議所より金杯を贈らる**	①仏・白のルール占領③孫文、広東大本営③工場法公布④石井・ランシング協定破棄⑨関東大震災
1931（昭和６／民国20）	⑨17逝去（於東京駿河台杏雲堂病院、脳溢血のため）⑨18関東軍、奉天占領　⑩30本葬（奉天）	⑤国民会議開催（南京）⑤広東国民政府⑦萬宝山事件、排日運動激化　夏．長江等大水害⑨18柳条湖事件、満州事変

堅一は日露戦争に従軍しなかった。妻・リウの病気が理由の一つであるという。妻の病状と戦況が落ち着くと、陸軍省より遼西物資調査を依頼され、新民府に赴くこととなった。さらに奉天へと

移動し茂林洋行設立。村田銃や石炭や牛の販売等、様々な事業に携わる。その一つに奉天の満鉄附属地での土木請負業があった。この先駆的な事業により「當時の奉天は荒涼たる原野で邦人にして家屋を建築したのは、君〔堅一〕を以て先驅者となす」（『奉天三十年史』）と評されることとなる。このころ日清貿易研究所の同窓生・深水十八は、初の日清合弁銀行である正隆銀行（一名正隆号）の設立を計画した。そして堅一も最初は資本参加のみの予定であった。

堅一自筆履歴書では「熊本縣深水十八氏と正隆銀行を設立す」とある。実際は深水十八が退き、堅一が担うこととなった。それは、堅一は正隆銀行の日清合弁の意義を評価したからであった。しかし金本位と銀本位の交錯する上に、横浜正金銀行や安田保全の思惑もあり、加えて奉天軍閥発行の奉天票の問題等、難問山積の銀行だったのである。

堅一は、高橋是清の仲介で正隆銀行の主導権を安田保全に譲った後、茂林洋行の事業拡大と諸企業の設立に積極的に関わる。奉天銀行、奉天市場株式会社（後に満鉄資金を導入して満洲市場株式会社となる）、瀋陽建物株式会社、奉天化学工業株式会社等々である。この時期、すなわち大正初期は第一次世界大戦の好景気であり、堅一は順風満帆、奉鐵倶楽部会員から満鉄の指導により改変された奉天商業会議所の副会頭に就任する。満鉄はじめ一同は、堅一を商業会議所の中心に据えるがごとく、選挙制によって入会と同時に副会頭に当選したのである。副会頭時代の茂林洋行の事業内容も多彩を極める。石炭販売業、ガラス工業、帝国生命保険株式会社、米国ギルモア石油販売会社代理店、クリーニング業、質屋業、甘草販売業等々である。

しかし、まもなく第一次世界大戦後の戦後不況の到来とともに状況は一変、堅一は、福岡市因幡町の自宅を売却して拡大しすぎた事業を縮小・整理した。一家は奉天琴平町五番地に移住。一族は奉天に骨を埋める決意をする。福岡市因幡町の自宅を売却せざるを得なかった負債支払先は東拓であった。このことは、堅一の経済上の立ち位置をよく示している。奉天の近代化には、やはり大資本の投下が必要であり、堅一は、東拓、満鉄だけでなく、安田保全、横浜正金銀行などともパイプを所持する有力者となっていた。奉天商業会議所副会頭を辞任してからの堅一は、一見、堅実路線に舵を切るように見える。

筆者は、堅一が質屋業を営んでいるのを興味深く感じる。かつて福岡で、「金貸然」としていると非難されたことと重ね合わせると、そうしたことが好きだったのか。否、おそらくはそうではなかろう。向野コレクションがどのようにして堅一の手元に集められたのか、未だ詳細ではない。質屋業開始以前から蒐集されていたものか、質屋業営業において蒐集されたものか謎のままである。しかし堅一は、自らの目利きに自信を有していたことは確かである。堅一の質屋には日本人のみならず現地人も来店した。堅一は、日本人の経済事情だけでなく、中国人の経済事情にも通じる立場にあったことになる。先般開催された第二回向野堅一祭（平成28年9月17～19日）の席上、廣瀬市郎直系の廣瀬脩二より、張学良から廣瀬市郎に与えられた銀時計が披露され、記念館に収蔵された。廣瀬市郎は、先妻・リウと後妻・シウの従兄弟で、妻・ルヰは堅一の姪である。茂林洋行の実

質上の支配人であり、堅一の右腕として辣腕を振るった人物である。銀時計の存在は、話としては伝わっていた。いかなる経緯で与えられたものかは判然としないものの、交流の一端が証明されたことになろう。玄洋社社員・末永節の書簡により、堅一が張作霖・張学良を動かす計画もあったことがうかがえる。６年間毎年、奉天商業会議所副会頭に当選し、その任を自ら辞任した後、財界の重責からは一歩退いたように見える。しかし、「重鎮」としての役割は減じていなかった。東京で満州事変の前夜に没した堅一の帰国は満洲事変と関わるものであったといわれている。まさに堅一の死は、一つの時代の終わりを象徴するものということができよう。

５．向野堅一研究の動向と課題―向野堅一記念館の目指すもの―

記念館は平成23年（2011）３月５日に開館した。筆者は平成28年３月６日に向野堅一記念館第二代館長に就任した。向野堅一顕彰会の全面的な支援の下、地元福岡県直方市を中心とする篤志者に支えられ、緩やかではあるが着実に発展している。課題は、資料の整理と研究体制の充実の二点と考えている。研究成果ならびに史料研究の公開を目指して『向野堅一記念館研究紀要』創刊号（2016.9.17）を刊行した。年刊で定期刊行する予定である。ここでは、記念館収蔵の史料を簡単に紹介し、研究の現状、課題などを検討してみたい。

（１）「向野堅一書簡」について：　向野康江「向野堅一（1868-1931）の経済活動―日清貿易模索から奉天実業界形成への道程／向野書簡を中心にして―」は、未公開の私文書「向野書簡」等の史料を活用した点で旧来の研究と画然と異なる地平を開いた[4]。記念館としては、この書簡群をきちんとした形で公開したいと考えている。ただし私文書には、配慮しなければならない課題もあり、一層精読し、精査しなければならないと考えている。また「向野堅一書簡」は、基本的に堅一に宛てられた書簡であり、堅一から発信されたものは少ない。したがって、堅一の肉声に迫るためには、各地に散在する堅一の発信した書簡を調査・承合する作業をしなければならない。当該研究は、究極のところ、堅一に通じる様々のネットワーク、たとえば日清貿易研究所研究者、玄洋社研究者、血縁・地縁、日清戦争研究者等々のネットワーク構造を浮き彫りにするものとなろう。なお「向野書簡」については、向野康江「向野堅一記念館所蔵「向野書簡」目録」」（一）～（四）（『茨城大学教育学部紀要』（人文・社会科学・芸術）62、63、2013、2014）がある。ただし仮目録的性格のものであり、全体的な検討を必要とすることは本人も認めている。また、堀地明「向野堅一の中国語教本」（『向野堅一記念館会報』４、2013）は、日清貿易研究所時代の教科書類を紹介してお

[4] https://kitakyu.repo.nii.ac.jp　において公開されている。本論文は、向野康江「直方に生まれたつよくやさしい日本人・向野堅一」（『茨城大学教育学部紀要』（人文・社会科学・芸術）59、2010）「向野一族と向野堅一の清国渡航以前における修学」（『社会システム研究』13、2015）「日清貿易研究所における学生生活―向野堅一の兄たちの書簡を手掛かりに―」（『アジア教育史研究』23、2014.3）日清商品陳列所の実修機能―向野堅一宛書簡に見る卒業生の苦闘―（『アジア教育史研究』25、2016.3）等の既発表論文を基礎としている。

り、画期的なものである。

（２）「向野堅一従軍日記」等について：　堅一の記述は正確である。その記憶力には驚異的なものがある。堅一の記憶において日清戦争従軍当時の現地における文化、信仰面についても検討しなければならない。いわゆる「旅順虐殺事件」に関しては、旧来日中双方において、堅一「従軍日記」記事を都合よく利用する言説が見られた。向野康江「向野堅一『明治二十七八年戦役餘聞戦役夜話』再考―「旅順事件」検討の前提として―」（近現代東北アジア地域史研究会『News letter』26、2014.12）向野康江・木村明史「「旅順虐殺事件」言説の再検討―向野堅一「従軍日記」「三崎山の追想」の利用に着目して―」は、旧来の中日の言説を丁寧に取り上げ、「従軍日記」「三崎山の追想」の史料上の限界を踏まえた論述であるべきことを説く。また浦辺登「『向野堅一従軍日記』(向野晋編)を読み解く」（『オピニオン季刊誌　夢・大アジア』1-3、2014-2016、継続中）は、「従軍日記」記事を引き「解説」を付すという構成を採用し、紹介を積み重ねる。

（３）家庭内雑誌『骨肉』について：　明治40年（1907）６月、妻・リウ逝去。堅一はリウの妹（廣瀬七三郎三女）シウと再婚する。これを機に福岡市住吉町から因幡町に転居する。一家が奉天に移住するまで、堅一は単身赴任の形態で活動していた。堅一が奉天で活動中、因幡町では、シウと先妻・リウの４人の息子、晋、有二、元生、啓助、加えて従兄弟たちとの生活が営まれた。大正2年（1913）9月、堅一は「晋・有二・元生・啓助宛書簡」において教育の基本的考えを表明している。その考えに基づき、12月から家庭内雑誌『骨肉』誌発行開始。記念館では、大正6年（1917）までの計27冊を保管している。一冊限りの家庭内雑誌であり、大正前期の先進的な家庭教育の動向の一端を伝える貴重な史料である。

『骨肉』誌については、斉藤太郎・向野康江を中心に継続的に研究を進めている。向野康江『子どものための美術教育―学校での図画工作教育と家庭でのART教育―』（弦書房、2010）第４部「大正期の一家庭におけるART教育―向野家所蔵『骨肉』に見る図画教育を主に―」は、図画教育の視点を中心に据えつつ、向野家の概要を踏まえて『骨肉』誌の全体像を描いており、『骨肉』誌研究の入門編的性格を有す。

また、斉藤太郎は、教育史研究の立場から継続的に成果を公表する。「『骨肉』―大正期家庭教育をうかがわせる手づくり雑誌―」（『桜花学園大学人文学部研究紀要』11、2009）「一九一七(大正六)年向野兄弟の朝鮮・満州旅行―『骨肉』・大正期家庭教育をうかがわせる手づくり雑誌(2)―」（『桜花学園大学人文学部研究紀要』12、2010）「正月を父と過ごす日々―大正四年の啓介日記から―」（『向野堅一記念館会報』２、2011）同「自分の将来をイメージすると…　―幼年学校生徒啓介の作文から―」（『向野堅一記念館会報』３、2012）同「向野啓助が描いた故郷奉天―一家の奉天移住が実現して―」（『向野堅一記念館会報』４、2013）同「異郷でわが子の成長に向き合う」（『向野堅一記念館研究紀要』１、2016）

皆川真理「大正期向野家における家庭内教育の基本線―『骨肉』掲載図画研究のための背景把握

として―」（『向野堅一記念館研究紀要』１、2016）山田秀平「大正期家庭内図画の学校図画との乖離―『日記』ならびに『骨肉』掲載向野啓助図画をめぐって―」（『向野堅一記念館研究紀要』１、2016）は、斉藤太郎・向野康江の指導を受け、研究を深める。

『骨肉』誌の伝える福岡向野家の家庭内の教育実態は、当時の先進的な動向であるともに、当時の大きな潮流の中にあるものである。大正期の家庭内教育の実態を伝える希少な史料であり、『骨肉』誌は、大正期の教育について様々な視点を提供する研究対象である。

（４）「向野文庫」について：　向野堅一記念館の架蔵史料の中で異彩を放つ史料群の一つは向野文庫である。本文庫は、旧小倉藩の蔵書を核とするものである。本文庫については、瑞石寺（曹洞宗、若宮市）住職、本多寛尚によって基礎整理がなされている。また、本多は、「秦巌（はたいわお）略伝」（『向野堅一記念館会報』３、2012）によって秦巌研究の端緒を開いた。

（５）その他：　向野コレクションの多くは福岡市博物館に寄託されている。一方、向野堅一記念館が保管しているもの、各々の子孫の手元に所在しているものなど、それらに対する整理・検討が必要である。

おわりに―「もう一つの『学都』岡山の物語」に参加して―

本稿での向野堅一像は十分に解明できているものではなく、研究途上に位置する稿である。特に向野康江の研究に負うところが多く、何とか新味を出そうとして考証に甘いところもある。向野康江の博論ならびに現在刊行に向けて編集中の近刊書を是非参照いただきたい。

「もう一つの『学都』岡山の物語」に参加して多くのことを勉強させていただいた。藤田佳久・遊佐徹の両報告にも触発されるところが多く感謝したい。ここでは日清貿易研究所出身者に関する土屋洋、村上節子、野口武の三報告に関して感じたことを記しておく。土屋洋「閑谷黌から日清貿易研究所へ―　福原林平とその日記『随感随録』について―」と村上節子「白岩龍平の徳望」の二発表は、岡山の閑谷黌から日清貿易研究所へと進んだ二人の人物について論じていた。白岩龍平は後に経済人として大成し、福原林平は日清戦争の中で不条理な死に方をしなければならなかった。生きながらえて大成した者がいれば、志半ばで命を失った者もいる。特別任務を命じられたものは、むしろ選ばれた者たちである。日清貿易研究所に学んだ者達は同学の無念の思いを心に刻みながら、激動の明治・大正・昭和前期を歩んだのである。

堅一も日清貿易研究所に学び、日清戦争に従軍した。彼自身は何とか任務を全うし、英雄の一人として賛美される。しかし一方で多数の友人を失う。そのことは堅一の信仰・思想にある種の影を投げかける。没後、堅一は、山崎羔三郎・鐘崎三郎・藤崎秀の三名の殉節を顕彰した金州三崎山の「殉節三烈士碑」に隣接する形で、「盡忠三烈士碑」として大熊鵬・猪田正吉とともに列せられる。この三崎山の両碑はすでに見ることはできない[5]。しかし東京の泉岳寺に三崎に関する碑があり、現在非公開となっている。向野堅一記念館としては、三崎の御遺族とも力を合わせてこの碑を

記念館に移設し、顕彰したいと考えている[6]。

また野口武「『対支回顧録』の編纂過程と「日清貿易研究所生一覧表」」において、日清貿易研究所生の総合的な把握の目指されていることを知ることができた。筆者は改めて、全体研究と個別研究との調和ということを考えた。近年、歴史研究の領域にもコンピュータが導入され、史料もデジタル化され、データ化されている。「日清貿易研究所生一覧表」は研究を大きく前進させるであろう。しかし生身の人物を扱うことに対する「恐れ」を大事にしなければならないであろう。矛盾多き時代をともに生きた人々への「賛歌」となるような「一覧表」となることを期待したい。

今回、学ばせていただいた諸点を参考にして一層の研究の深化を目指したい。「歴史は個にして全、全にして個なるものである」という大きな視点をもって、個別具体的なテーマを考え、各テーマに還元できればと考えている。

東アジアへの飛躍を目指した一人の日本人・向野堅一の実像を究明する当記念館が抱える当面の課題は、記念館の維持であり、保管資料の整理・調査である。史料に向き合う姿勢はあくまでも敬虔でありたい。自己の研究、売名のための利用は御免こうむりたい。また、記念館は堅一の生誕の地・直方の地域とともにあることを認識しておくべきである。向野堅一顕彰会は地域への還元を願っているからである。ゆえに、貴重な資料は実直な姿勢で研究を深めていこうとする人々に対して公開を許すべきであろう。微力ながら、博雅の御助言を賜りながら一歩一歩前進したいと考えている。

---

5 大島一朗「『盡忠三烈士碑』調査について」（『向野堅一記念館会報』４、2013）参照。

6 武田鐘崎墓前祭（2016.5.3.於青木天満宮、久留米市城島町上青木）の後、鐘崎三郎御遺族・角隆恵様を囲んでの懇談の席上、角隆恵様より、「鐘崎三郎、福岡県三潴郡中村綱次宛書簡」（明治二十七年九月四日）一巻、「烈士　鐘崎三郎之碑・画」（正雲）一幅を、久保田毅様より『鐘崎寛吾・三郎の父子を慕いて』（資料編集・久保田毅、資料提供・角隆恵、資料作成・角正夫、私家版、平成26年７月31日発行、36-8頁）を頂戴した。御遺族の思いを大事にして、少しでも早く、実現したいと考えている。